2022 年度派遣学生による留学報告会（カザフスタン）

報告書

筑波大学

日本財団中央アジア・日本人材育成プロジェクト

2022

日本財団 THE NIPPON FOUNDATION

NIPCA Project

待望の中央アジア諸国（カザフスタン）への派遣再開を喜ぶ！

臼山　利信
筑波大学人文社会系教授・NipCA プロジェクト実務責任者

2020 年初頭からコロナ禍に見舞われ、2019 年度の秋学期（2020 年 3 月）に実施予定だった「海外語学研修ロシア語 C（カザフスタン）」、「海外インターンシップ研修（キルギス）」（2020 年 1 月～ 2 月）が相次いで中止となり、その後、3 年間、中央アジア諸国を対象とする交換留学、海外語学研修を行うことはできませんでした。

2020 年度、2021 年度、2022 年度に入学した学生たちは、2 ～ 3 年間、オンライン中心の授業しか受けられず、大変な思いをしました。創薬研究者の不眠不休の努力によってコロナワクチンが開発され、自由に外を移動できるような社会が戻りました。2022 年度の春学期から徐々に対面授業に切り替わり、秋学期には授業がほぼ対面授業になりました。

中断していた CIS 諸国を対象とする国際交流を再開できる目処もたち、手始めに、筑波大学との CiC（キャンパスインキャンパス）協定締結大学であるカザフスタン共和国のアルファラビ・カザフ国立大学準備学部（外国人学生が 1 年間程度の語学教育や専門基礎教育を受けて、正規学部に進学できるようにするための学部）で、2023 年 2 月 17 日（金）から 3 月 24 日（金）までの 36 日間、待望の「海外語学研修ロシア語 C（カザフスタン）」（カザフ語学習を一部含む）を実施しました。参加学生は留学生 1 名を含む総勢 11 名で、国際総合学類 4 名（2 年生－ 3 名、1 年生－ 1 名）、人文学類 3 名（3 年生－ 1 名、1 年生－ 2 名）、地球学類 1 名（3 年生－ 1 名）、工学システム学類 1 名（1 年生－ 1 名）、数学類 1 名（1 年生－ 1 名）、看護学類 1 名（2 年生－ 1 名）です。

本報告書は、この海外語学研修に参加した学生たちがカザフスタン共和国でホストファミリーと生活を共にし、現地の大学でロシア語やカザフ語を学び、アルマトイや首都アスタナなどを巡り、現地で感じたこと、考えたことなどを帰国報告会の場で発表した内容を収めています。3 グループによる発表ですが、それぞれ個性があり、瑞々しい感性からほとばしり出た、等身大の言葉が満ち溢れています。私は、この帰国報告会に参加し、学生たちの確かな成長の足跡を感じ、感激の感を拭えません。プライドを捨てて必死に勉強する、過去・現在の自分と現地で生きる自分を客体視する、カザフスタン社会から日本社会を眺め直す、日本文化と日本人やカザフ文化とカザフ語・ロシア語を相対視する、カザフ人の生き方・行動と自分の生き方・行動を比べて価値観の重なるところと異なるところを見比べる、等々、わずか 36 日間の滞在なのに、半年間にも 1 年間にも匹敵するかのような中身の濃い時間を過ごしたことが伺い知れます。

この学生たちの成長した姿こそが海外語学研修を行う最大の価値だと改めて実感します。自己を客体視する力（メタ認知力）を大きく高めた学生たちがこれからの大学生活や卒業後のキャリアの中で、今回の海外語学研修の経験と知見を存分に活かしてほしいと心から願っています。

最後に、日頃から筑波大学 NipCA プロジェクトを温かく見守り支えてくださっている公益財団法人の笹川陽平会長、森祐次常務理事、有川孝国際事業部長、勝俣創介国際事業部チームリーダー、松尾雅子さま、日本・中央アジア友好財団（JACAFA）のヴルボスキ京子会長に対して、衷心より厚く御礼を申し上げます。

2023年春季
海外研修

帰国報告会

研修先：**アルファラビ・カザフ国立大学**

今のうちに、海外経験を積んでおきたい！
ロシア語履修していないけど、ロシア語圏に留学してみたい！

体験談を聞いてみませんか？

日　　時：２０２３年６月23日（金）
18：30～19：45

会　　場：人文社会学系棟　A101　会議室

内　　容：語学研修参加者による報告
（研修を通して学んだこと、質問コーナーなど）

事前申込不要：参加をご希望の方は、直接会場までお越しください。

会場：人文社会学系　A101

中央図書館側の入り口から入ると
右側がA棟です。
階段で1階まで降りてください。

＜問合せ＞
筑波大学　「日本財団中央アジア・日本人材育成プロジェクト」事務室：共同研究棟A203
TEL：029-853-4251
Email: info@genis.jinsha.tsukuba.ac.jp
ウェブサイト
https://centralasia.jinsha.tsukuba.ac.jp/

NipCA Project　日本財団 THE NIPPON FOUNDATION

梶山　ただ今より、2022 年度アルファラビ・カザフ国立大学語学研修の帰国報告会を開始いたします。本日の進行を務めます、NipCA プロジェクトの梶山と申します。学生の発表に移る前に、臼山先生、最初に一言あいさつをよろしいでしょうか。

臼山　今回、コロナ明けということで 11 名もの学生を送ることができて、本当によかったなと心から喜んでいます。それから、心配された現地での適応も、いつの間にか皆さん、ホストファミリーの中で愛情たっぷりに、コミュニケーションも取れて、カザフスタンを満喫しているような感じがしました。最後の報告のレポートも一人一人が素晴らしい内容だったと思います。異文化体験を実際にして、学んできたなということを文面から感じました。

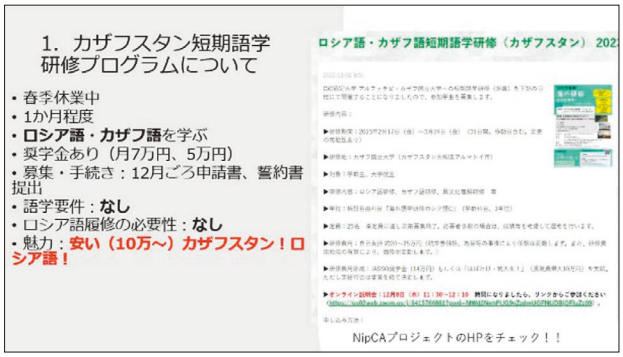
今日は、実際に向こうで体験したことを自分の言葉でスライドにまとめて発表してくれるということなので、本当に楽しみにしています。分かっているメンバーばかりですので、あまり緊張することなく、気楽に自然体でやってください。

梶山　それでは、3 つのグループに分けて発表していただきます。全ての発表が終わったあとで質疑応答の時間を取りたいと思います。それでは、まずグループ A の発表者の竹内さん、村上さん、上殿さん、木村さん、よろしくお願いします。

竹内　こんにちは。

上殿　では、グループ A の発表を始めます。全員知っていると思いますが、カザフスタンは、ロシアの南、中国の西側にあります。公用語はロシア語とカザフ語とされており、国家語はカザフ語です。ロシア語はインド・ヨーロッパ語、カザフ語はテュルク語で全然違う文法体系ですが、多くの人が 2 つの言語を話すことができます。

カザフスタン短期語学研修プログラムは、春季休業中に 1 カ月程度行われます。ロシア語とカザフ語を学ぶ



という、ロシア語だけではないプログラムとなっていて、条件を満たせば、月 7 万円もしくは 5 万円の奨学金を頂いて短期語学研修に行くことができます。

私たちが行ったときの募集は、12 月頃に NipCA プロジェクトのホームページに出ており、申請書と誓約書の提出が応募手続きになります。語学要件は特になしで、ロシア語を履修している必要性もありません。私はロシア語履修者だったのですが、今回の語学研修には履修していない人も参加して、ロシア語がすごく上手になっていました。

魅力としては、欧米諸国などの大学で実施される、ほかの語学研修と比べて安価に行けるということです。例えば、私の友人でカナダのプリンス・エドワード島の英語の語学研修に行っていた人は 60 万円かかったと言っていたのですが、このプログラムだと、旅行などをしなければ 10 万円くらいで行けます。カザフスタンというなかなか行けない国にも行けるし、ロシア語もカザフ語も学べるところが魅力だと思います。

私たちが学んだのは、カザフ国立大学の準備学部という学部です。授業のレベルとしては、筑波大学の第二外国語のロシア語の授業よりも少し簡単か難しいくらいでした。中級、上級クラスもあるので、全ての学習者がレベルに合った授業を受けることができます。

これは、ナウルーズの休みに、クラスのみんなで先生とご飯を食べに行ったときの写真です。これが、CiC 科目といって、カザフ国立大学と筑波大学は特別な協定を

結んでいるので、その英語科目を受けに行ったときの写真です。これは日本語弁論大会の写真です。どんな感じでしたか。

竹内　豊通という会社があるじゃないですか。

臼山　豊田通商ですね。非常に有名な総合商社です。

竹内　大きい商社や大使館の偉い方が来ていて、お金もかかっているし、優勝したカザフ人の人は日本渡航が副賞でもらえたり、2位の人も iPad などをもらえたりするというものです。僕は、出場した人とお友達になったのですが、今年の夏に北海道の中標津に来るらしくて、東京に遊びに来たりしたら会える日が楽しみですね。

上殿　ということだそうです。これが学生フォーラムの様子です。特に、東洋学部日本学科の学生たちと一緒に現地でサポートしてもらって生活をしていたのですが、その学生たちと、ロシア語と日本語でカザフスタンと日本のインクルーシブ教育を話し合うフォーラムを行いました。

都市の説明に移ります。これが、私たちが滞在していたアルマトイという都市の写真です。左は街中央にあるパンフィロフ戦士公園で、モスクワ防衛に参加したカザフスタンの英雄たちの像があって、そこに聖火がずっと燃えています。この公園の中にある楽器博物館と戦争博物館に行ってきました。右は、行っていないのですが、コクトベという遊園地的なところから撮った写真らしいです。楽器博物館には、カザフスタンの伝統的な楽器、ドンブラや、何でしたっけ。

竹内　コムズ。こういうふうに立てて弾きます。

上殿　バイオリン的な弾き方をする楽器で、ドンブラはギターみたいな感じなのですが、それがたくさんありました。あと、戦争博物館は、特にロシアの内戦とか…。

竹内　というよりも…。

上殿　第２次世界大戦？

竹内　そう、一番大きいのは大祖国戦争ですね。その後はアフガン侵攻や内戦等がいろいろ載っていて、ソ連時代の戦争が多いです。それ以降のロシアの戦争というのはあまり取り扱っていません。

上殿　詳しく見てみると結構面白くて、昔のものになると、兵士の身分証などが置いてあるのですが、ロシア語の表記と、あとアラビア文字の表記、アラビア文字は読めないのですが、たぶんカザフ語等なのかなと思います。そういった言語がごちゃごちゃになっているような、歴史的な史料がたくさん置いてあります。

アルマトイは旧都なので、たくさんの劇場や博物館等が市内に点在していて、とてもいい街でした。

竹内　代わりまして、アルマトイでの主な交通機関は、公共交通機関だとバスと地下鉄ですが、これがまた安いのです。バスは 80 テンゲ（約 30 円）、ONAY を使わなかったら 150 テンゲぐらいの値段で安いし、払ってしまったらもうずっと乗っていていい。どこまで行っても同じ値段です。

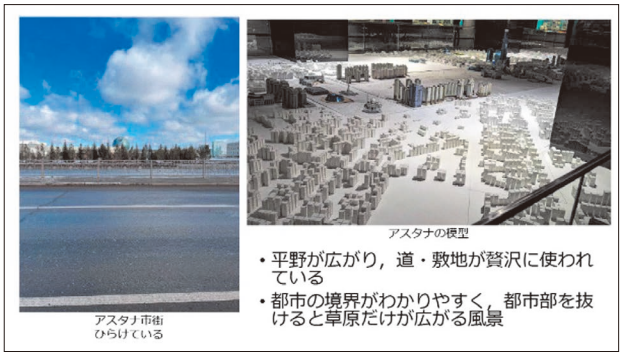
街なかでは、皆さんも使っていたはずの ONAY というカードがあり（日本で言う Suica みたいなもの）、こ

れでバスにも地下鉄にも乗れます。なおかつ、そのチャージの機械が街のあちこちにあります。これはカザフスタンが進んでいるなと思ったところで、そういう機械で携帯の料金やカードの支払いもできますし、カザフ版 Google Pay みたいなものの支払いやチャージもできます。

日本だとバスに乗ったらそこからそこまでという感じですが、アルマトイはバスの路線が市内じゅうに張り巡らされていてずっと動いているので、地下鉄や鉄道のように乗り換えるというタイミングがあります。なので、バスを乗り継いでどこまでも行けるという感じで、とても便利でした。

朝のラッシュは満員も満員、日本の比ではないぐらい満員です。パンパンで、なぜこうなのかと聞くと、「人が多いし車も多い。バスもたくさん来ているけれども輸送が追い付いていない」ということでした。

次は、首都のアスタナです。僕たちは休みを利用して、鉄道に乗ってアスタナに行きました。ここに映っている写真、中央はバイテレクというアスタナのランドマーク的なタワーです。上のところは展望台になっていて、アスタナの街じゅうを一望することができます。左右はグランドモスクです。中央アジアで一番大きいらしく、非常にきれいです。縮尺が分からないかもしれませんが、手前の階段がこれです。天井も非常に高くて、かつハイテクで、床暖房も完備されています。日本で言う PayPay のような、カスピという QR 決済でザカート



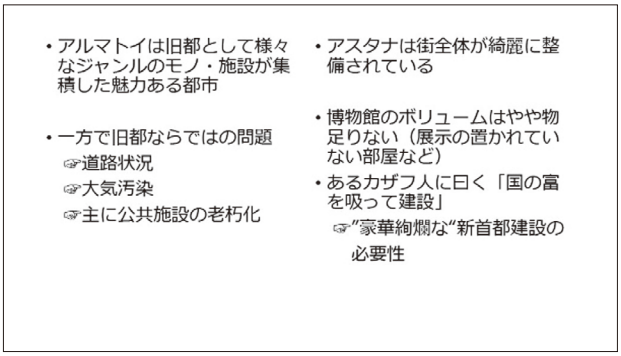
（イスラム教の喜捨行為）までできるという、なかなか進んでいるモスクでした。

次のスライドの左はアスタナ市街で、全部平野です。ステップをぜいたくに使った計画都市で道が碁盤の目状に広がっているのですが、どこまでも続く平野でした。都市の境界が分かりやすく、都市部を抜けると草原だけが広がる風景で、まるでシムシティ（都市経営シミュレーションゲーム）のような計画都市です。この街の基本デザインを手がけたのは、黒川紀章（1934 ～ 2007）という日本の著名な建築家です。右は博物館で、この模型は都市計画の特集コーナーにありました。アスタナの街というのは、この模型どおりの平野ですね。

アルマトイは 1997 年まで首都であり、現在もさまざまなジャンルのモノ・施設が集積した魅力ある都市といわれていて、いろいろな娯楽があります。日本の京都みたいなものだと思うのですが、道もごちゃごちゃしているし、娯楽もいっぱいあります。アスタナは街全体がきれいで、まるでつくばセンターをそのまま大きくしたような大規模な街です。でもそれぞれに良い点と悪い点があります。

アルマトイには、いろいろなブランドの店やショッピングモール等があるのですが、旧都ならではの問題点として、道路状況、大気汚染、主に公共施設の老朽化があります。旧市街のほうに行くと、旧ソ連時代から使われている建物とか、旧市街の官公庁が大学に転用されたりとか、博物館なども実は昔は違う建物だったとか、そういう建物がたくさんあります。特にひどいのが道路状況です。バスに乗ってもタクシーに乗っても、ラッシュの時間にあたってしまうと、家に帰るのに 1 時間以上、普段ならタクシーで 5 分の道も 30 分以上かかってしまいます。こういう状況になってしまった原因として、これまで道だったところを公園にしてしまったということがあります。前の市長が道路を公園にしてしまったせいでこんなごちゃごちゃになっていると、タクシーの運転手は言っていました。

アスタナにも、街全体がきれいにされている一方で、ちょっとした問題があります。少しスカスカなのです。博物館のボリュームが物足りない。建物も街も全部規模が大きいので、それをギチギチに詰めることはあまりできないのですが、それでもやはり街全体が、主に市街の部分は新しいので、ボリュームが足りないのではないかと思います。それから、あるカザフ人曰く、「国の富を吸って建設」。まさにそうですね。お金がかかっています。カザフスタンの首都としてお金をかけて建設された、



豪華絢爛な新首都建設の必要性について議論が一部にあったわけです。

文化と宗教、伝統的な生活というものもあります。カザフスタンは伝統的に遊牧の国家です。カザフ人も遊牧民でした。ですから、定住している普通の生活の中にも、至る所に遊牧の痕跡、文化がずっと残っています。左は皆さんもご存じの、モンゴルだと「ゲル」といいますが、カザフ語では「キイズ・ウイ」という移動式のテントです。中央の写真のこのような渦巻きの模様は、遊牧民の中でもよくモチーフとして使われていることが多いと現地の人から伺いました。右はアスタナの博物館に展示されていた、矢の筒と弓を持った遊牧文化の服装です。このような伝統的な生活も残されています。

そして、祝日を重要視していて、親戚が集まります。僕がホームステイしていた家は地上３階、地下１階ぐらいの信じられないくらい大きい家で、誕生日や祝日のときに親族が集まるのですが、家の中にこの教室の長机のようなものがあるわけです。そこに親戚が 50 人くらい集まって、全員があいさつしていきます。いろいろな食事を作って、みんなに振る舞って、スピーチをして、乾杯して、クムス（馬乳酒）を飲む。そういったことが行われていました。

僕たちが行った時期にあった祝日が、女性の日とナウルーズです。女性の日というのは国際女性デーと日本では呼ばれていますが、ここの女性の日は、日本や欧米諸国と違って女性の権利を考える日という扱いではなく、母親や女性の美しさ・強さをたたえる日という扱いを受けている印象でした。その日には、男性は、お世話になっている女の人や知り合いの女の人全員に花を贈ります。僕も花を贈りました。大量のチューリップを買って、皆さんに「ありがとう」と言って、いろいろ渡していくわけです。大学の先生にも渡したりします。この日はプレゼントをする文化も結構あるらしく、ホームステイしていた家のお父さんがお母さんに車を贈ったこともあるという話を聞きました。

食事にもルールがあります。年長の男性から配膳し、お茶は女性が入れるというルールも一応あって、例えば、同級生だけれども誕生日が僕より遅い人、１歳年下の人ともてなしてもらう機会があったときに、一番年長者は誰だと聞かれて、自分だと言うと、自分から食事を渡されたということがありました。

一方、断食をしない、ヒジャブをかぶらない、飲酒する等の若いカザフ人もいます。これは本当にさまざまです。ラマダンを全くしない人もいれば、ラマダンをする人もいる。ヒジャブをかぶらない人もいれば、かぶる人もいる。若いか年を取っているかは関係なく、例えば、ラマダンはするけれどもお酒は飲むという人もいるし、お酒も飲まないしラマダンもしないという人もいれば、結構年がいっている人でもお酒は飲むという人もいます。それでも食事のときにはイスラム式のあいさつ、あるいはカザフスタン流の文化的なあいさつもする。そして、男性同士が会ったときには「アッサラーム・アライクム」と返すといったような、さまざまな文化が混ざり合っている印象を受けました。このスライドにも書いてあるのですが、伝統的な価値観が今日でも強い影響を与えています。日本・カザフ両国でいろいろな価値観が表れて、その中でどのような文化を受容していくか揺れ動いています。

この写真はナウルーズ（後述）ですね。アルマトイには全部歩道になっている通りがありまして、そこでは出店などがあり、ステージなどを組んで歌っている人がいたりとお祭り騒ぎなのですが、ここで結構怖い目に遭いました。ふらふらとした変なおじさんが、「お前はどこから来たんだ。中国か、韓国か」と聞いてきて、「いや、日本です」「日本はいい国だ。俺は北野武の映画が大好きなんだ」と言って、そこからずっと話し掛けてくるのです。「タバコを吸うか」「いや、要りません」「じゃあ、これはどうだ」と言って、おもむろに胸ポケットから、緑色の植物片がパンパンに詰まったボトルを出してきたのです。これはまずいなと思って逃げたのですが、追い

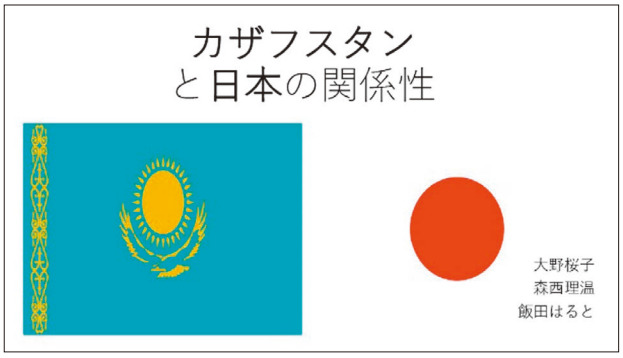
掛けてきて、「お前、さっき俺から金を取っただろう」と因縁を付けられました。そこまでくると言葉も分からなくなってしまって、日本語で喧嘩して、逃げて、何とか追い払って、その後、ホストシスターが迎えに来て、「怖い思いをしたよね。お酒を飲んで忘れなさい」と言って、ビールをおごってくれました。そういうこともありました。

ナウルーズというのは、カザフスタンでは春分の日から３日間ぐらい祝われる、旧正月みたいなものです。３日間というのはなぜなのか聞きそびれました。ずっと帰省したり、家でナウルーズ料理を食べたりという、新年を祝うイベントとしての色が強いなと思いました。Ａグループの発表は以上とさせていただきます。

梶山　竹内さん、上殿さん、ありがとうございました。時間が押していますので、続けてグループＢの大野さん、森西さん、飯田さん、「カザフスタンと日本の関係性」というタイトルで報告をお願いします。

大野　こんにちは。グループＢの発表を始めます。私たちは、カザフスタンと日本の関係性について探っていきたいと思います。

まず私が発表する部分は、カザフスタンで見た日本文化の紹介と、日本とカザフスタンの政治的関係性についてです。森西君が、日本語弁論大会についてと、カザフスタンと日本がより良い関係を築くためにこれからどうやって発展していくかというところと、今回欠席した飯田君の考察について、代理で話したいと思います。



目次

1　カザフスタンでみた日本文化（大野）
2　政治的関係性
3　日本語弁論大会（森西）
4　カザフスタンと日本がより良い関係を築くために
5　考察（飯田）

カザフスタンから見た日本は？

まず、カザフスタンから見た日本というのはどのような感じなのでしょうかということで、私が現地で買ったＴシャツを用意しました。私たちが渡航したのは２月の中旬で、すごく寒いと言われていたので、私は非常に怖そうな、強そうなジャケットを持っていったのですが、現地では暖房が効いていて、室内は暑くて半袖でないと耐えられないのでＴシャツを買いに行きました。そこで出会ったのがこれです。日本や韓国のＴシャツを売っているところでこれを見つけました。不自然な日本語ですが、キャラクターの尻尾が富士山だったりして斬新です。着物、桜など、カザフスタンから見た日本はこういう感じなのかなというのを感じさせるＴシャツでした。

次に、食べ物についてです。日本の食べ物といったら寿司をイメージする人が多いと思うのですが、これは、ショッピングセンターのフードコートです。お店の名前が「PIZZA VS SUSHI」で、ピザに寿司が匹敵しているということで、現地で食べた寿司を見てみると、アボカドだったりマヨネーズだったり、中国系の寿司と言っていました。ご飯も酢飯ではないし、寿司か分からないようなものが非常に高い値段で売られていました。ほかにも、私が持っていったカップラーメンをホストファミリーに食べさせたところ、とてもおいしいと子どもは食べるのですが、大人は食べられないという感じでした。日本に旅行したことがあるカザフ人もカップラーメンをたくさん買って帰るということなのですが、あまり味が

合わないという人が多くてびっくりしました。

この左側の写真は、日本の村上春樹の小説を書店で見つけたときの写真です。私が目にした翻訳された小説は、村上春樹と太宰治くらいでした。右の桜の写真は、私たちが帰国した後に咲いたのですが、カザフスタンでも桜が咲いているよといって送ってくれた写真です。

次に、右がカラオケです。カラオケは日本にもたくさんあると思うのですが、カザフスタンにもたくさんあって、現地の学生に聞くと、誕生日を大人数で祝うときなどに結構使うみたいです。

左は「ウィルス防衛隊」と日本語で書いてあるのですが、私が非常に驚いたのは、日本の医薬品が街に出回っていて、ホストファミリーの親戚が来たときに日本のサプリをたくさん持ってきて、注意書きが読めなくて何個飲めばいいか分からないから読んでくれと言われました。そんな感じで、サプリやコロナ対策のものなど、結構日本の医薬品が出回っているのかなと思いました。

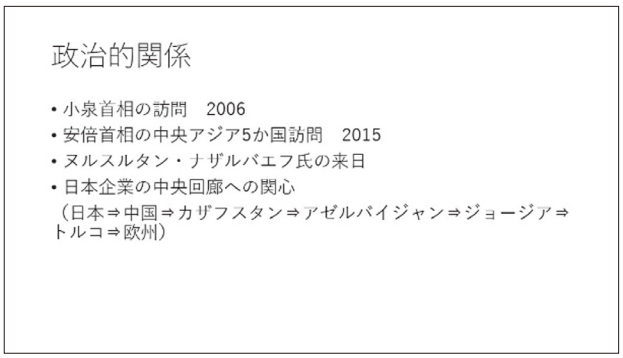
あと、日本の文化といえば漫画・アニメというイメージが強いですが、私たちが観光地などに行っているときに、日本人だと気付いて話し掛けてくれる人には、「私はこの漫画が好き」と言ってくれる人がたくさんいました。真ん中の写真は、漫画喫茶でしょうか、「MANGA」と書いてあるお店があって、書店に並んでいる漫画が日本の漫画よりも大きくて、子どもでも読みやすいような感じになっていましたが、非常に高かったです。

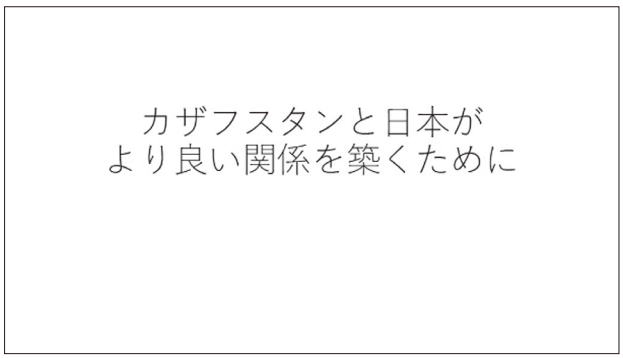
左の写真を見てください。小学生はリュックサックで学校へ通っているのですが、日本のアニメのキャラクターものが結構多かったです。写真では見えないのですが、真ん中に吾峠呼世晴の『鬼滅の刃』があったり、そういう日本のアニメが結構多かったのが印象的です。

右下は、ONE 原作の『ワンパンマン』という日本のアニメなのですが、このヒーローの名前がサイタマというのですね。私は出身が埼玉で、現地に着いたときに「出身はどこ？」と聞かれて、「埼玉」と答えたら、真っ先にこれが思いついたみたいで、初日はみんなでこれを鑑賞しました。

次に、カザフスタンと日本の政治的な側面について話していきたいと思います。これは先ほど紹介にあったように、アスタナは、黒川紀章さんという日本人の建築家によって構想・設計され、つくられており、こういったところにも日本とカザフスタンの関係性が見られると思います。

また、政治的には、小泉純一郎首相の訪問や安倍晋三





首相の中央アジア５カ国訪問などで、日本がカザフを訪れるという経緯があります。また、カザフスタン初代大統領のヌルスルタン・ナザルバエフ氏が来日したこともあります。また、日本から中国、中国からカザフスタン、カザフスタンからアゼルバイジャン、ジョージア、トルコ、欧州というような中央回廊も画策されていて、日本企業はそれに関心を持っています。次に、森西君、お願いします。

森西　代わりました、森西です。先ほどもお話があったと思うのですが、僕らが研修に行っていた３月 11 日に日本語弁論大会が行われました。ここでは、カザフスタンで日本語を勉強しているカザフスタンの学生が、まず日本語でスピーチをした後、日本語でされた質問に即興で返す必要があって、非常にレベルが高いものでした。皆さん、日本とカザフスタンの文化や、自分の経験を踏まえて得られた学びなどについてお話しされていて、本当に流暢で、話し方もうまくて、すごいなという気持ちでした。

この弁論大会の審査の間に余興があるのですが、そこでは文化交流のようなコーナーがあって、カザフスタンの方が日本の歌を歌ったり、踊りを踊ったりしました。僕らは、全員ではないのですが、留学に行っていた慶応義塾大学の学生と一緒にカラジョルガというカザフスタンの伝統的な踊りを踊りました。

カザフスタンと日本がより良い関係を築くためにということに関連してお話をしていきたいと思います。まず、カザフスタンから見た日本は、先進的な技術と、アニメや漫画などの文化を兼ね備えた国であるという印象を受けました。「先進的な技術」の代表的なものは自動車です。日本車は、カザフスタン、アルマトイで、非常によく見られました。私がお世話になったホストファミリーも実際、日本車に乗っていて、うちのホストファミリーはマツダ車がいいと言っていました。そういう感じで、かなり技術力を評価しているという声は多かったです。

ただ、そういう技術を持っているにも関わらず、日本国内でペーパーレス化があまり進んでいないことを不思議がる意見がありました。例えば、カザフスタンから日本の筑波大学に留学する学生の話を聞いたのですが、入国や留学関連の手続きに紙の書類が多すぎる、日本はなぜまだペーパーレス化が進まないのかという意見がありました。カザフスタンだと、かなりペーパーレス化、オンライン化が進んでいて、免許証など公的な書類であってもオンラインのネットを介した手続きができるようです。また先ほどのお話にもあったように、キャッシュレスなどもかなり進んでいて、タクシーもクレジットカードをオンラインでつないでいて、それで呼べるので、私もホストファミリーに何度か、そのオンラインでタクシーを呼んでもらいました。技術的な面はそういう感じです。

次に政治的な観点でいうと、カザフスタンは地理的な事情もあって、中国やロシアとのつながりが深いということがありました。ただ、近年になると、それを脱却し

ようという動きがあります。それに関連してですが、カザフスタンは非常に土地が広く天然資源も非常に豊富です。ロシアは、ソ連が崩壊した後カザフスタンが力を持つことを恐れて、資源の輸出等を制限するように圧力をかけることがあったようです。それで、ロシアへの不満もあったりして、そういう結び付き、圧力から脱却しようという動きが強まっています。そういうことからも、日本とのつながりを強めていける可能性はあるのかなと考えます。

経済的には、既に日本と結び付きが強いといえるかもしれません。例えばアルマトイ市内の水道は、日本企業が出資して整備されたようなものです。このような感じで、出資や技術的な協力などが、関係を築く上で大きなきっかけになるのではないかと考えました。

文化的には、先ほど大野さんの話にあったように、日本の文化はかなりカザフスタンの方にも受け入れられているようです。漫画やアニメというのはかなり人気ですし、日本食も、海があまりないというカザフスタンの地理的な事情や宗教的な事情に合わせてカザフスタン風にアレンジされていますが、少なくともそういうところへの関心はあるのだなと感じました。日本語を勉強して、実際、日本に留学に来ているカザフスタンの学生も非常に多く、文化的な交流は進んでいるのではないかと感じました。

考察

- カザフスタンからみた日本は、先進的な技術と、アニメや漫画などの文化を兼ね備えた国であるという印象を受けた。
- 政治的にカザフスタンを中露との繋がりが深く、近年それを脱却するための施策をおこなっている→日本とのつながりが強くなるかも
- アルマトイ市内の水道は日本企業が出資して作ったもの

→経済的にはすでに結びつきが強いといえるかもしれない

- 日本語を勉強し、日本に留学する学生が多い

→文化的交流は進んでいる

一方で、われわれ日本人がカザフスタンのことをどれぐらい知っているかというと、カザフスタンの方々が日本に持ってくださっているイメージほど、われわれはカザフスタンや中央アジアのことを知らないのではないかと思いました。実際、私もこの研修への参加を決めるまでは、カザフスタンや中央アジアに関してあまりよく知らない状況でした。そういう意味で、より良い関係を築くというふうに考えたときには、まず第一歩としてお互いのことを知る、特に、どちらかというと私たち日本人がカザフスタンについて知る。そしてカザフスタンの情報をいろいろ発信していくことが大事なのかなと考えました。

あとは、私の考察としては、日本人全員ではないのですが、英語や外国語を話すことにやや苦手意識を感じている人もいるのではないかと思いますが、カザフ語というのはすごく日本語と似ている言語です。系統的、歴史的というか祖先という意味では、関係が立証されていないというのが主流な考え方ですが、類型論、つまり言語の特徴でいうと、例えば文法の語順であるとか接尾辞で格を表すところがかなり似ています。

例えば、「私は日本から来た」は、「Мен Жапониядан келдім（メン ジャポニヤダン ケルディム）」と言います。「Мен」が「私」、「Жапония」が「日本」、「дан」というのが「から」、「来る」というのが「кел」で、「た」という過去が「дім」で、まさにそのまま「Мен Жапониядан келдім」というふうにいけます。このような感じで、カザフ語を含むテュルク諸語といわれるグループは、日本語と非常に近い文法的な特徴を持っています。

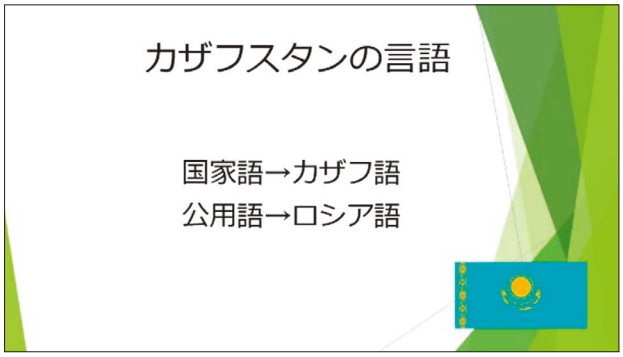
こういうところは日本人が学ぶのにいいのではないか、日本人が外国語への苦手意識を払拭するきっかけとして、まずは文法的に近い外国語を学んでみるのはありではないかと思いました。私も実際、現地でホストファミリーの方々とは、簡単な片言ではありますがカザフ語で話しました。「今日、どうだった」「今日は何をした」、あとはご飯に関してとか、夕食のときなどにカザフ語でお話しすることがありまして、そういう経験は私自身すごく自信にもなりました。カザフ語だけではなく、ほかの外国語を学ぶ上でもモチベーションにもなりますし、このように学んでいくといいのだなという学びを得るきっかけになりました。

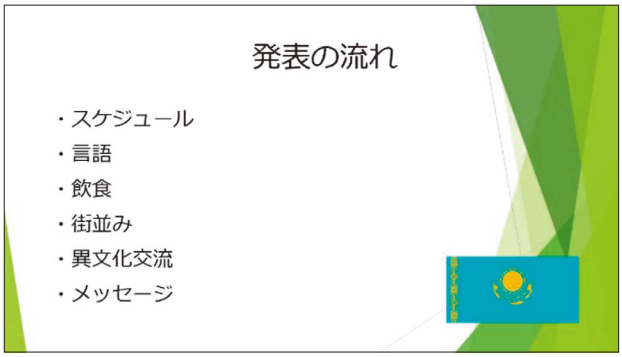
こういうふうに、日本のほかの皆さんにも、テュルク諸語、カザフ語を含め、そういう言語に触れてもらうことで、ひいては英語など幅広い言語に関して親しむきっかけになるのではないかと思いました。カザフ語に限らずテュルク諸語に関する教育の機会や、カザフ語・テュルク諸語話者の方との交流の機会を増やしていくというのは、いろいろな意味でいいのではないかと思いました。

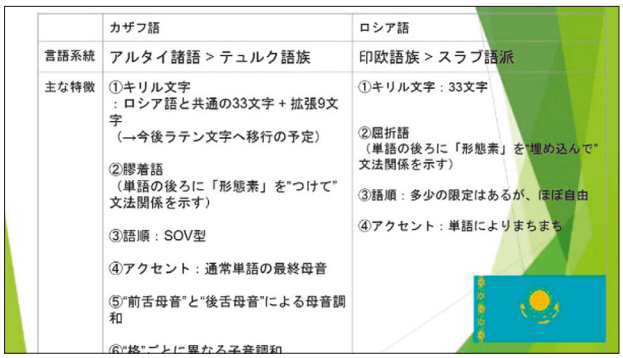
大野　B グループの発表を終わります。

徐　これからグループ C の発表を始めたいと思います。私たちのグループは、主にカザフスタンでの暮らし全般について発表します。

発表は、次のような流れです。スケジュール、言語、飲食、街並み、異文化交流と、これらに興味を持っている方へのメッセージです。スケジュールは、A グループの方がもう説明してくれたので、言語から始めたいと思







	カザフ語	ロシア語
言語系統	アルタイ諸語 > テュルク語族	印欧語族 > スラブ語派
主な特徴	①キリル文字 ：ロシア語と共通の33文字 + 拡張9文字 （→今後ラテン文字へ移行の予定） ②膠着語 （単語の後ろに「形態素」を"つけて"文法関係を示す） ③語順：SOV型 ④アクセント：通常単語の最終母音 ⑤"前舌母音"と"後舌母音"による母音調和 ⑥"格"ごとに異なる子音調和	①キリル文字：33文字 ②屈折語 （単語の後ろに「形態素」を"埋め込んで"文法関係を示す） ③語順：多少の限定はあるが、ほぼ自由 ④アクセント：単語によりまちまち

います。では、お願いします。

鳥居　こんにちは。では、まずカザフスタンの言語について話していきたいと思います。最初から言語などといういかつい話をしますが、後で写真などがたくさんあるので、楽しみにしていてください。

カザフスタンの言語は、先ほども出てきたように、国家語がカザフ語で、公用語がロシア語とカザフ語です。

カザフ語とロシア語にはこのような違いがあります。先ほど感動したのですが、最後に森西君が言語について奇跡的に言ってくれたので、いいつなぎになります。本当によかったなと思います。先ほど、カザフ語の言語系統のところで、アルタイ諸語とテュルク語族の話になりましたが、日本語はアルタイ諸語に含まれます。

言語というのは、枝分かれしていて末端にその言語があるわけですが、カザフスタンには、カザフ語とロシア語のバイリンガルという人たちがたくさんいます。本当にすごいなと思うのが、実はこの二つは、言語系統の根っこが全く違う言語なのです。例えばフランス語とドイツ語など、そういう同系統の言語でのバイリンガルとかトリリンガルとかはいるのですが、ここまではっきり違う言語系統でバイリンガル社会が成立しているのはすごいなと感じます。

僕のホストファミリーの８歳の女の子ですら、家族同士ではカザフ語ですが、僕に話し掛けるときは完璧にロシア語に切り替えていて、小さいながら本当に言語の才能があるなと思いました。

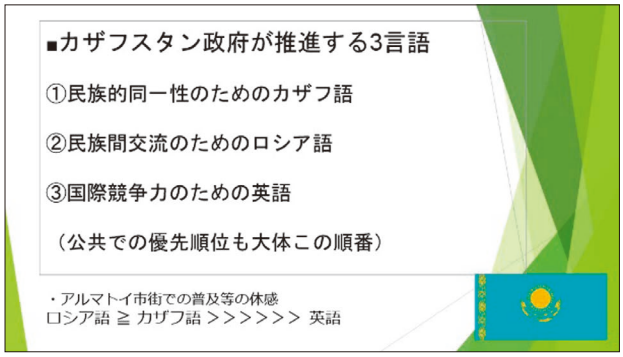
このようにいろいろな違いがあるのですが、全部説明することはありません。特にすごいなと思ったのはアクセントです。英語圏でも、現地語に合わせて訛りがあるではないですか。この訛りというのが、ロシア語で全然分からないのですが、素人目に見ても訛りというものがないなと感じて、そこもすごいなと思いました。

あと、語順です。カザフ語はSOV型で、日本語と同様に主語、目的語、述語となります。一方、ロシア語は印欧語族で、ほぼ自由なのですが、SVOが基本かなという感じがします。

この語順というのは、結構ものの捉え方にも関係してくると思います。何を重要と捉えるか、まず何を先に言いたいかということです。ソシュールという人が「言語が変われば、ものの捉え方も変わる」みたいなことを言ったのですが、幼い頃からこの異なる二つの見方ができるというのは、大変うらやましいなと感じます。

ただ後で聞いたのですが、家庭環境によっては、このように幼い子がロシア語とカザフ語のどちらもできるのは結構珍しいことだそうです。中にはロシア語しか話せない子がいると聞いたことがあるので、珍しいタイプだったのかなとも思います。

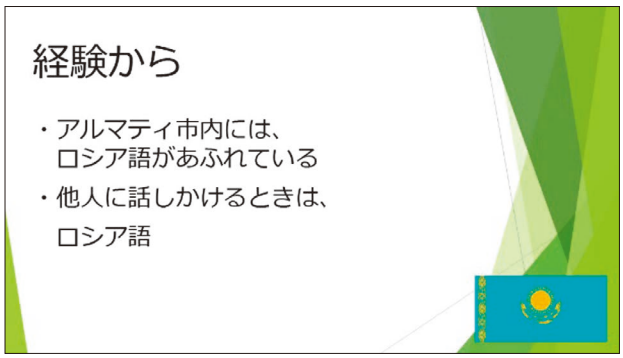
カザフスタン政府は、推進したい言語が三つあります。まず民族的同一性、アイデンティティとしてのカザフ語、それと民族間交流のためのロシア語、そして国際競争力のための英語、この３言語を重視したいようです。現地での体感としては、英語は相対的にあまりできないこ

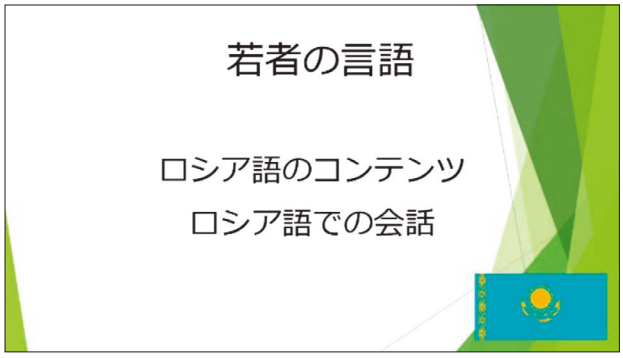


とが多いのではないかと思いました。もちろん大学では、優秀な学生が非常に多く、英語を非常に流暢に話して、英語で授業を普通に受けているのですが、巷では、まだ英語はそれほど浸透していない印象かなと思います。

公共での優先順位もカザフ語、ロシア語、英語の順番です。地下鉄、メトロに乗っていても、最初にカザフ語で言って、ロシア語で言って、最後に英語という順番で話すことが多いのですが、3 言語で言わなくてはいけないために、英語で「ドアが閉まります。気を付けてください」と言うときにはもう電車が出発していたりと驚きました。この順番でうまくいっているのかなという感じです。ここで私の発表は以上となります。

松田　次に、私からは、実際にカザフスタンに行って経験したことの中から、この言語について考えてみたいと思います。私たちが学び生活したアルマティ市内には、印象として、カザフ語よりもロシア語のほうがあふれているのではないかと感じています。先ほど鳥居君が言ってくれたように、公共交通機関ではカザフ語、ロシア語、英語の順番で話されていますが、レストランに行くと大体最初はロシア語のメニューが出てきます。お店に行っても、店員さんはロシア語で話し掛けてきたり、ロシア語のあいさつをしてきたりということが多かったです。道を歩いているときやバスの中で何回か話し掛けられたのですが、そのときはほとんどロシア語という感じでした。



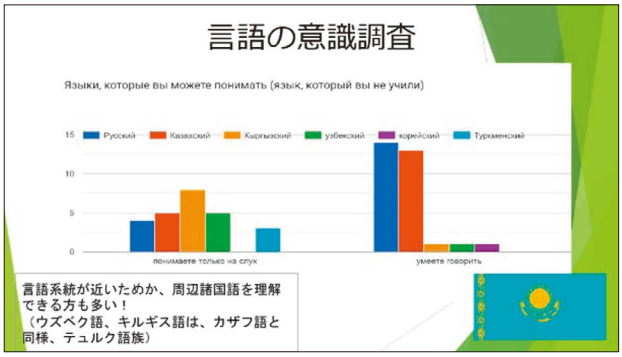


自分たちは、カザフ国立大学に行ってそこの学生と交流したのですが、若者の間ではかなりロシア語のほうが多く使われているなと感じました。その理由としては、エンターテインメントや若者に人気のコンテンツなどはロシア語のほうが多くて、市内では相対的にカザフ語を話す人が少ないがために、ロシアという大国の中でつくられたコンテンツなどがカザフスタンにそのまま流れてくるということがあります。また実際に映画に行ったときも、音声はロシア語でカザフ語が字幕というように、ロシア語のほうが中心として捉えられているかなという感じでした。

もちろんカザフ語を自分の第一言語と思っている学生もいるのですが、若者の間ではロシア語で話すことがほとんどです。小学校に行くときに、勉強をロシア語でするかカザフ語でするかを選ぶと聞いたのですが、そこでカザフ語を選んだとしても、大学に来て、友達との会話ではロシア語を使うことが多いという理由でロシア語をまた勉強しはじめたという学生もいるほど、ロシア語が若者の中では一番の言語かなという感覚を、アルマトイの実生活で受けました。

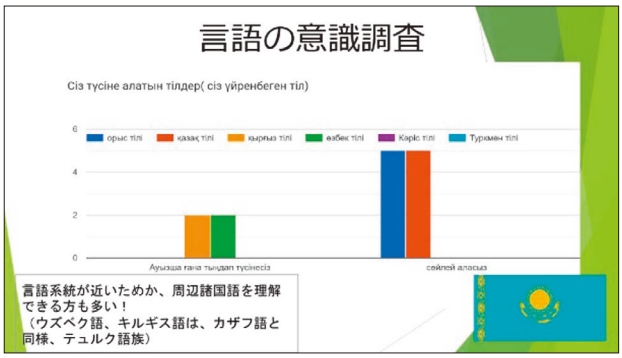
それでも、言語に対してどんな意識を持っているかを調べるために、実際に行って知り合ったカザフ人たちにアンケートをとりました。アンケートはロシア語とカザフ語で作って、ロシア語かカザフ語、どちらかしか話せない人も答えられるようにしました。聞いた項目は、年齢、職業、出身地域、聞き取れる言語と話せる言語です。またロシア語とカザフ語のどちらを第一言語と思っているかを、ロシア語を第一言語と思っている場合は 1、カザフ語を第一言語と思っている場合は 10 として、1 ～ 10 の値で示してもらうようにしました。あとは、学んでいる言語とその言語を学んでいる理由を聞きました。

これがロシア語のほうの、聞き取れる言語と話せる言語の違いなんですが、聞き取れる言語の、このロシア語とカザフ語はこちらに入っているのですが、これは全部で 14 人のアンケートで、キルギス語を聞き取れる人が 7 人、8 人くらい、ウズベク語を聞き取れる人が 5 人、

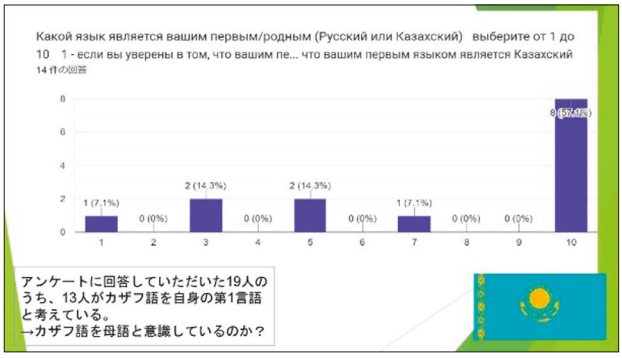


トルクメン語を聞き取れる人も３人いました。全員がロシア語を話せて、１人だけカザフ語を話せないけれども、13 人はカザフ語を話せるという結果になりました。

こちらがカザフ語のアンケートの結果です。やはりキルギス語とウズベク語を聞き取れる人が２人、カザフ語を話せる人は全員ロシア語を話せるという結果になりました。

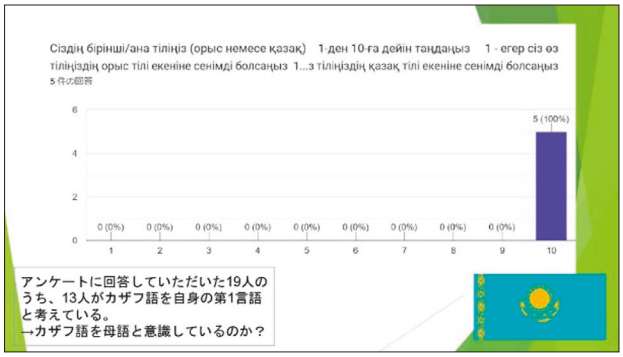


この結果を踏まえて見てもらいたいのですが、次の項目で、ロシア語とカザフ語、どちらを第一言語と思っているかを聞きました。こちらがロシア語のアンケートを答えた人です。ロシア語のアンケートを答えたということは、ロシア語のほうが使いやすいと考えられるのですが、ロシア語を話せる人が 14 人、カザフ語を話せる人が 13 人という中で、8 人が 10 を選んでいます。これは、完璧にカザフ語を第一言語と思っている人が 8 人もいたという結果になりました。ロシア語のアンケートに答えた中で、ロシア語もカザフ語も話せる中でカザフ語を



10 と答えているということは、結構大きな差の出た結果ではないかと思います。

こちらはカザフ語のアンケートで、第一言語を聞いた結果です。やはり、カザフ語のアンケートに答えている人はカザフ語のほうが使いやすいと考えられるので、もちろん第一言語を 10 で、一番はカザフ語と答えたと考えられます。アンケートに答えてくれた人は全部で 19 人で、そのうち 13 人がカザフ語を完璧に第一言語と考えているので、街なかにロシア語があふれていて、カザフ語もロシア語も扱える中でカザフ語を 10 と答えたのは、カザフ語を第一言語として意識的に、国の政策もありますが、ロシア語よりもカザフ語を自分の中のアイデンティティとして捉えているのだなということが分かりました。



吉田　僕からは、カザフスタンの食文化と街並みについての経験や考察を述べたいと思います。食文化に関してのポイントは二つで、肉が多いということと、いろいろな食文化の融合という点が指摘できると思います。

これは全部、料理の写真を挙げただけなのですが、まず、伝統料理のビシュバルマクです。ビシュバルマクにはいろいろな形態があります。これも一種の形ということでお許しいただきたいのですが、これは私のホームステイ先で出たものです。馬肉を使っており、その辺は騎馬民族としてのルーツも感じるなと思っています。やはり肉が多いのは、内陸国という特徴がよく表れていると思いました。海の魚を食べる機会というのは、少なくと

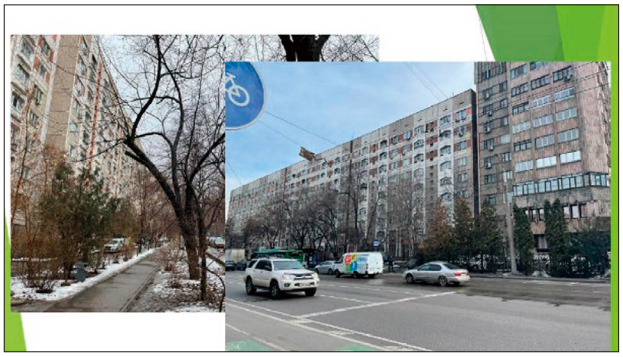
も僕が滞在している間はありませんでした。川魚を食べる機会はありまして、実際、バザールなどにも川魚は売っていたのですが、見ていてもあまり鮮度などの状態は良くないようで、やはり肉中心の食文化だなとは思いました。

右の写真は、名前が曖昧で、ラグマンと言われていた気がするのですが、違いますか。マンティですか。マンティ、そうですね。失礼しました。マンティでした。名前をよく覚えていなくて、これも、ボルサキ、バウルサキのような、ちょっとよく分からない発音だった揚げパンです。こういうプロフも家で作ったりしていました。今、肉中心と言ったのですが、もう一個、いろいろな食文化の融合という点は指摘できるかなと思います。

このプロフというのは、もともとはウズベクのほうの料理ですし、ボルシチなども出たのですが、ご存じのとおり、ボルシチというのはウクライナやロシアの伝統的なスープ料理です。あとは、ドネルケバブが街なかでもよく売っていて、みんな好きだったのですが、これもトルコの印象があると思います。このように、周辺諸国のいろいろな食文化がこのカザフスタンで融合または混在しているなと思いました。現地には高麗人（主に沿海州から移住した朝鮮民族の末裔の人々）もかなりいて、バザールでもその民族料理だけで１個のコーナーが占められていたりしました。これはナウルーズの伝統的なスープです。

では、ここからはカザフスタンのアルマトイの街並みについてお話ししたいと思います。皆さん散々見たと思うのですが、これがアルマトイです。こういうアルマトイの市域が広がっていて、もう少しズームすると、こちらのほうはごちゃごちゃしているのですが、中心部には、四角く区切られたグリッド状の街区が広がっています。こういうグリッド状に区切られた街区というのは画一的で、行ってみるとこのようにコンクリート建てののっぺりした建物が多く、冷たい街並みに感じるかもしれませんが、実際に歩くと全然そんなことはありませんでした。

こういうソビエト的なものを感じる権威的な建物もあります。冷たい街並みっぽく見えるけど全然そんなことはないというのは、これは少し分かりづらい例かもしれませんが、街の中には、こういうふうに歩行者空間に開いている階段とか、店の中が完全に見えるようになっているガラスのショーウインドーみたいなものが多いなという印象があります。こういうふうに歩行者の目線でレストランが展開しているというのもありますし、歩いていて非常に楽しい街並みだなと僕は感じました。こうい



う歩行者目線みたいなことを大事にしているのかなとは、少し感じました。

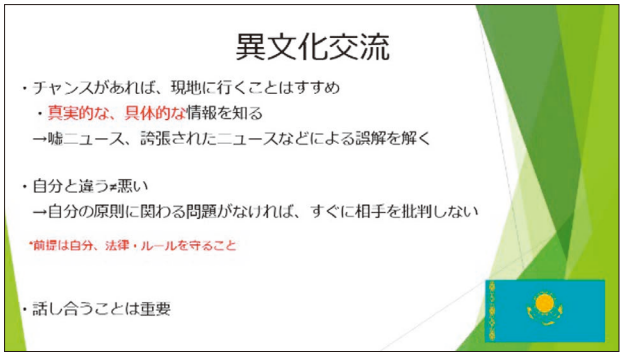
こういう壁画なども、街なかにいろいろありました。このアルマトイという都市がまだまだ発展途上という事情はもちろんあると思うのですが、高層化の進む日本とはだいぶ違って、歩行者の目線を大事にしているのかなと思いました。

ここからは完全に僕の感想になるのですが、こういう歩行者を大事にする目線のようなものは、バザールの空間との類似点があると思います。こういうバザールの空間は日本ではあまり見られないと思っていて、いろいろなものが積み上げられて、ゴミゴミしていて、店員さんとお客さんの距離がすごく近くて、通行者の目線をすごく意識できる空間の典がこのバザールだと思うのですが、こういう空間をつくる意識のようなものが習慣として無意識にあるのかなと思いました。

これはスライドを作っていないのですが、やはり都市計画専攻としてはアスタナの黒川紀章の計画都市も見てみたかったのですが、僕は39度近い熱を3日間にわたって出してしまいました。これは面白かったので共有したいのですが、熱を出したときの対処法として、あり得ない濃度の塩水でうがいをさせられ、のどが焼けるかと思いました。僕は、これは果たして療法として正しいのか疑心暗鬼になりながらやっていたのですが、誰か有識者がいたら教えていただきたいなと思います。以上です。

徐　これからは異文化交流についてです。実は、アルマトイはカザフスタンの街ですが、そこで出会った人はカザフスタン人ばかりではなくて、学生としては中国、韓国、モンゴル、イラン、イラク、インド、パキスタン、たくさんの国の学生に会いましたし、観光客としては、一人のオランダ人観光客に会ったこともあります。異文化交流としては、まずは外国人として日本に来て、外国人としてもう一度カザフスタンに行って、とても面白い経験だと思います。

チャンスがあれば、興味があるところに行ったほうがいいと思います。なぜかというと、行かないと、わからないことが絶対多いと思います。行けば、真実や具体的な情報がちゃんと分かると思います。なぜかというと、今は嘘のニュースや誇張されたニュース、うわさが多すぎるからです。カザフスタンに行くことを身近な人に伝えたとき、その歯医者さんは、知り合いがアルマトイに住んでいたことがあって「おお、いいですね」と好意的に反応したのですが、歯医者さんの隣に立っていた看護



師さんは、「ええ？　カザフスタン？　そんな国に行けるの？」という疑念を持った反応でした。行ったことがある人やカザフスタン出身の人は、カザフスタンに対する評価が高くて、行ったことがない人は評価が低い傾向があるのかもしれません。

Google でアルマトイと検索したら、この画面が出ると思います。賑やかな感じですが、自分が撮ったアルマトイはこんな感じです。

例えば、この左上の写真は、宗教的な建築です。右上の写真は、私が住んでいた場所の近くの、ある日の夕暮れです。中央下の写真は、よく行くスーパーの外の駐車場から撮った写真です。自分は雪が大好きです。

こんな点字ブロックもあります。そこで2、3人の視覚障害者に会いましたが、残念なことに、これを利用した人は一人もいませんでした。もし現地に行き自分の目で見れば、その国をもっと客観的に捉えることができると思います。そして、異文化交流としては、やはり自分と違うところを見つけることができます。このときに大切なのは、「自分と違う≠悪い」ということを覚えたほうがいいと思います。もしその違いが自分の原則的な問題ではなかったら、すぐに批判しないことが大切だと思います。例えば、ある国に行って、レストランで何かを食べて、嘔吐をしたり下痢をしたりしても、すぐこの国のものが汚いと批判しないで、自分が慣れないことが理由なのか、本当にそのレストランが悪いのか、どちらが理由なのかをもう一度考えたほうがいいと思います。なぜかというと、自分の家族は、中国で、四つの省出身で、自分は五つ目の省に生まれました。一番左の街から一番右までは、日本の山口から宮城までの距離で、たくさんのところに住んだことがあって、あるところに行ったとき、そこの食べ物にあまり慣れなくて、そうした症状が出たことがあります。その地の食べ物が汚いわけではありません。自分が慣れていないだけです。でも、この「自分と違う≠悪い」ということの前提は、自分を守ること、法律とルールを守ることです。もしも自分と違うところが不法行為だったら、それは悪いことだと判断してもいいと思います。

そして、自分と違うことが見つかったら、話し合うことが重要だと思います。例えば、その違いが分からないときは、「これはどうしてですか」と相手に質問する。相手の行動に対して不満があったら、「いや、それはちょっと」と言ってきちんと伝えることが大切です。日本ではちょっと自分の考えを出しにくい感じがあります。賛成ではない意見を出すときなどは、自分だったら、直接「それは○○です」とはっきりと言います。しかし、日本では、多くの場合、「えーっと、それはちょっと……」とか、「えー、それはどうでしょうね」とか、きっぱり答えることができません。でも、私は5カ国で暮らしたことがあって、その中で空気を読むことを強調するのは日本だけです。空気を読み、何も意見を出さないことが良いとは限りません。私は、賛成でないことは曖昧にしないで、自分の意見を相手に伝えること、しっかりと話し合うということがとても大事だと思います。

以上が私の発表です。そして皆さんに伝えたいメッセージです。

松田　自分からのメッセージは、行こうかどうしようか、色々と悩むかもしれませんが、まずは思い切って一歩踏み出して、何も考えずにカザフスタンに行ってみてください、ということです。絶対に新しい発見があります。

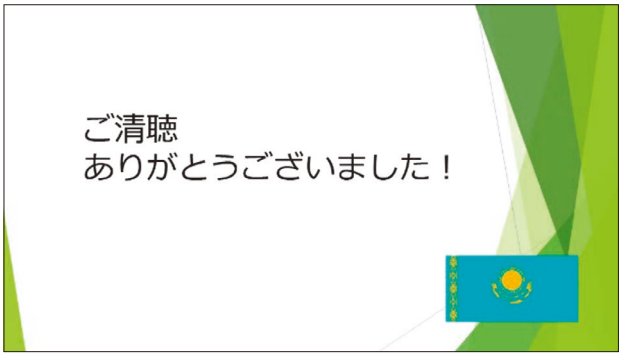
自分が発見し、一番驚いたことは、自分が100%カ

ザフ人に似ているということで、現地で何度もカザフ人に間違えられました。これも行ったから発見できたことです。逆に、カザフスタンを見て、日本について発見したこと、気づいたこともあります。例えば、カザフスタンの階段というのは、たまに段差がすぐ上の段と違っているのです。最初の段の高さはこんなに低いのに、最後の段の高さはその10倍くらい大きいとか、そんなこともあって、日本は段差がまったくなく、すごくきれいに細部までこだわって整備された国だなと思いました。それに気付いたのも、カザフスタンに行ったからです。必ず新しい発見があるので、行ったことがない人は、行ってみるといいと思います。

徐　私のメッセージは、松田さんと矛盾がありそうですが、応募する前に自分の状況をちゃんと考えたほうがいいと思います。12月に応募、そして2月17日に出発でした。私は医学部生なので、たぶんほかの学部よりも忙しいかと思いますが、自分としては、最後の試験が2月15日の午後で、17日には出発ということで、応募から出発までは時間的な余裕がなく結構ストレスがかかって、非常につらいと感じました。ですから応募する前に、時間の配分とか、家族がどれくらいサポートできるのか、それらをきちんと考えて応募することをお勧めします。準備がちゃんと整ったら、何も考えないでカザフスタンに行ってください。

鳥居　「おなかがいっぱい」のロシア語表現、男性の場合は「наелся」、女性の場合は「наелась」を忘れるなということですが、これはかなり大切です。「おなかがいっぱい」を言わないと、永遠に盛られます。僕も胃腸炎になりかけました。まず、胃の中が空っぽになることがありません。常に何かが胃袋に入っている状態で困りました。このロシア語表現をメッセージに書くか迷いましたが、これはやはり切実なことだと思ったので書いておきました。

あと、ちょっと別な話になるのですが、書こうとしてあえてやめたことがあります。カザフスタンは、僕が思うに、結構治安がいいです。「～スタン」と聞くと、先ほども言ったように結構偏見で、危ないのではないかということもあるのですが、そういう危険なところに行かなければ、治安が意外といいと思いました。しかし、ここに書いて油断するのもよくないので、やはり海外に行くのであればそれなりに準備して、綿密な計画を立てて行かないといけないので書くことはやめましたが、あまり不安視しなくてもいいと思います。ということで、これを忘れないでください。



吉田　僕はこのメッセージを書くと知らなくて、書かなかったのですが、もしカザフスタンに行ったら、自分が外国人に話し掛けられたときをイメージすると分かりやすいと思うのですが、伝えようと必死になって努力すると、意外と相手も分かろうと努力してくれるので、片言でもよいので頑張って伝えようとしてみてください。以上です。

鳥居　これでグループCの発表を終わります。ご清聴ありがとうございました。

梶山　皆さん、ありがとうございました。次は質疑応答とコメントの時間を取りたいと思います。ご質問のある方、お願いします。

臼山　誰からも手が上がらないので、先頭バッターとして私が質問しましょうか。

梶山　そうですね。中央アジアの専門家の先生方も来ていますので、コメント等ありましたらお願いしたいと思います。

臼山　では、全員に聞きたいのですが、今回、1カ月以上の超短期の留学だったと思うのですが、行ってみて一番よかったこと、いい意味で自分が一番変わったなと思うこと、それと、大変だったことは何ですか。行ってよかった、自分が変わったことと、カザフスタンで苦労したこと、プラス面とマイナス面の二つを教えてください。

梶山　どうでしょうか。

臼山　全員、1人ずつ、名前を言って教えてください。

竹内　竹内です。ロシア語はやったことがなかったので、

1ミリも分からなかったのですが、1カ月経つ頃には、買い物や先生方が言っていることぐらいは分かるようになったので、その点は良かったかなと思います。あと、ご飯はおいしかったし、体調も良くなったので、よかったですね。

臼山　大変だったことは、どんなことですか。

竹内　言葉は分からないですけれども、何とかなるかなと思いました。

臼山　実は2、3週間前、カザフスタンに出張に行ったときに、竹内君が住んでいたホームステイ先に行ってきました。「翔一朗、翔一朗」と言っていましたよ。「翔一朗はどうした？元気か？」「また来てほしい」と言っていました。

竹内　来年ぐらいに行きます。

上殿　上殿です。変わったことは、行って帰ってきた後は、結構友達等に明るくなったねと言われたことです。今はちょっと暗くなりました。カザフスタンの人は、本当にフレンドリーで、片言のロシア語でもすごく分かろうとしてくださるし、カザフ国立大学の日本学科の学生たちのサポートがとても手厚かったので、友達がたくさんできて明るくなったのかなと思います。

臼山　非常にいいですね。

上殿　大変だったことは、アルマトイの空気が結構私は合わなくて、3週間ぐらいずっと咳が出ていました。

臼山　確かにガソリン車の排気ガスで、空気が汚いですよね。

上殿　1回、咳が出すぎて止まらなくて、バス停で吐きました。そういうことがあったので、マスクが必要かなと思いました。

大野　大野桜子です。楽しかったのは、人がすごくよかったなと思います。私もロシア語を全くやっていなかったのですが、ホストファミリーがサマル先生の親戚の方だったこともあって、サポートを手厚くしてくれて、ロシア語を家でも教えてくれたりして、非常に楽しかったです。大変だったことは、やはりロシア語未履修だったということもあって、授業で、日本語でもやっていない文法を説明されて、最初は意味が分かりませんでした。でも、その家庭の人が教えてくれたりして、乗り越えることができました。

徐　徐毓晗です。楽しかったこと、一番幸せと感じたことは、ホストファミリーの家に住んだことです。とても素晴らしい家族だと思います。今でもその家族の娘さんと連絡を取っています。

二つ目のいいところは、自分の言語に関する能力をあらためて認識したことです。カザフ語の授業がある日は、毎日、五つか六つの言語を使いますので、自分はすごいと思うようになりました。

行った後は、つらいことが特にありませんでした。行く前のことになるのですが、応募してから出発までは休んだことがない気がして、その中でクレジットカードが破損したり、準備が大変だったり、コロナによってビザの政策が多少変わったので、とにかく対応するので精一杯でした。最後のテストが2月15日で、出発の前は結構つらかったと思います。出発の後は、少し病気にかかったこと以外、ほぼないと思います。

森西　森西です。よかったなというのは、日本とは違う柔軟さみたいなところを体験できたことですね。ルールに縛られすぎずに、臨機応変に対応できるというのがカザフ社会の良いところだなと思いました。自分自身、日本にいたときはかなり気にしすぎるところがあったのですが、変に気にしすぎずに振る舞えるようになったのがよかったと思います。

大変だったのは、実はその柔軟さの裏返しで、柔軟さの限度を超えてしまうところ、柔軟すぎる点ですね。柔軟すぎて、全然予定と違うじゃないかというのは、良いところでもあり、悪いところでもあるのかなということで、そこに慣れるのが結構大変でした。

あと、一応言っておくと、帰国のときに、ホストファミリーのご家族が日本に留学するということで、もうその家族は先に出発されていたので、追加で日本に持っていってほしいものがあるといって、鞄を渡されたのです。別に薬とかではないのですが、成田に着いて、検疫に引っ掛かって、開けたら果物が入っていたのですね。ですから、信頼できるホストファミリーだからといって、中身まで信用しないようにするということがかなり大事な教訓です。これは、悪意があって薬を入れるケース以外でも、そのホストファミリーは検疫で駄目だということを知らずに、留学生の方に届けたいという思いで入れていただけで、ホストファミリーも悪いとは言えないので、そういう意味で、信頼できるというのと確認しなくていいというのはまた違う、というのは教訓です。

臼山　知り合いでも、中身は必ず確認しなくてはいけないですね。

吉田　吉田快斗です。行ってよかったことは、まずは言語の話です。それまで1年間ロシア語を履修していたのですが、僕自身の勉強が足りなくて、正直、それほどレベルが上がったとはいえませんでした。しかし、実際に現地に行って、習ってきた言語が曲がりなりにも通じ

ている、本当に使えるのだという感覚がとても嬉しかったです。そういう現場に行くと言語学習のモチベーションが一気に上がると個人的には感じました。

あとは、先ほど森西君も言っていたのですが、あちらの柔軟な気風とか人の性格というのは、一般的に言って、日本と結構違うのだなと感じました。人というのは日本と外国で全然違うのだということを生で感じられたことが、行ってよかったと思う点です。

これは僕の専攻の話になってしまうのですが、都市計画をする上で、地図で見るのと実際に街に行くのとでは、ここでも全然違うのだなと思いました。実際に行ってみないと分からないことがいろいろあるというのが感じられてよかったです。

大変だったことは、僕は現地で39度近い熱を3日間にわたって出したのですが、現地で病気をすると、本当に心細いと思いました。結構真面目に、「俺はここで死ぬのかな」という気持ちになります。ですから、病院とか、自分が病気をしたときにどうするかという対策というか、危機管理のことは考えてもいいような気がします。

鳥居　鳥居健太と申します。行ってよかったことは、結構似ているかもしれませんが、積極性が身に付いたかなと思います。現地ではみんな積極的な性格なので、その雰囲気に混じって自分もだんだん積極的に行動できるようになり、そういうことが日本に帰ってきてからも多少は残っているというのが、とてもよかったなと思います。

例えば、誰かに話し掛けるときでも、行く前は、話し掛けて何かなると嫌なので、取りあえず話し掛けないでおこうと思っていました。でも、行ってからは、取りあえず話し掛けてみよう、それで変な空気になってもそれはそれでいいという感じで、積極性が身に付いたのは、非常にいい結果だったなと思います。あとは、ロシア語を現地で使えたというのもよかったと思います。

悪かったところは、ちょっとトイレが苦手でしたね。レストランなどは比較的きれいですが、現地の大学はトイレの整備にもう少し投資すべきだと思いました。地方に行ったときもそうでした。トルキスタンという800キロぐらい離れたところに行ったとき、途中のガソリンスタンドみたいなところでトイレ休憩があったのですが、ぼっとん便所みたいなのがあって、そこで人生で初めてアンモニア臭というものを感じました。カザフスタンでは、もう少しトイレに投資をしてもいいと思いました。

臼山　おそらく、中央アジアのトイレ事情は、みんな似たり寄ったりだと思います。

鳥居　でも、その代わり、多少汚い環境でも……。コロナで消毒液を結構使う機会が多くなって、潔癖性気味になっていたのですが、それが結構緩和されたと思います。そういう良いところもありました。

松田　松田直也です。行ってよかったのは、まず一つ目は、ロシア語学習のモチベーションが上がったことです。自分は理系なのでロシア語を勉強する時間がなく、カザフスタンに行くとなった後も全然勉強できていなくて、テストが出発の前日まであったのですが、行ってからロシア語に集中しようと考えていました。実際に現地の学生と会って話しているうちに、自分のロシア語のレベルの低さを実感して心の底からもっと話せるようになりたいなと思いました。

もう一つのよかったことは、現地の学生と出会えたことです。自分のホストファミリーの家には、日本語を学んでいる同い年の学生がいて、彼と夜中まで日本語と英語とロシア語を使って話したり、カザフ国立大学の日本語学科の学生たちと一緒にいろいろなところへ行ったりして、非常に楽しかったという経験があります。

大変だったことは、一番は、どうしても日本人だと思われなかったことです。日本人というのは、日本というだけで、「写真を撮って」と言われるなど、人気者になるのです。でも、自分は日本人だと言っても日本人だと思われなくて、どうしても日本人だと思われたかったのですが、無理でした。最後には、成田空港でも、日本人のおじさんに「どこから来たの？」と言われました。いずれにしても、カザフスタンで、日本語で会話しているのに「日本語がうまいね」と言われたことが、日本人として一番納得できませんでした。

臼山　どうもありがとうございました。参加した学生一人一人のコメントは、どれも貴重な実体験に裏付けられたものであり、とても説得力がありました。本当に素晴らしい内容です。

梶山　では、もう時間ですので、臼山先生、最後にお願いします。

臼山　山本先生、奥先生にもコメントを一言頂いて、最後に私から少しお話しして終わりたいと思います。

山本　山本です。NipCAプロジェクトの教員をしています。出発前になかなか関わることがなかったのですが、今日のプレゼンテーションを聞いて、学生の皆さんが、1カ月間非常に充実した時間を過ごしたことがよくわかり、とてもよかったなと思います。しばらくコロナ禍でできなかった語学研修だったので、最後バタバタと忙しい状況ではありましたが、実現できてよかったなとあらためて感じました。

この中には、今までロシア語を学んだことがない学生の皆さんも何人かいたようですが、1カ月間ロシア語を勉強して、今も続けていますか。短い期間でも、外国に行き、現地で学ぶという経験は、モチベーションになると思うので、学習の機会が日本ではだいぶ減ると思いますが、ぜひ続けていってもらいたいと願っています。今日はありがとうございました。

臼山　山本先生、ありがとうございます。次に奥先生のコメントですが、その前に一言。今度、人文学類開講の、トルクメン語の集中講義を行いますので、もし出たい人は奥先生のトルクメン語の授業を取ってください。

奥　すみません。宣伝しに来たみたいになってしまいました。トルクメン語を研究しております奥と申します。今日は皆さん、ご発表をありがとうございました。いろいろな写真やまとめた文など、それぞれ皆さんの興味が多種多様で、いろいろな視点でカザフスタンを観察していて、私としては大変面白く聞かせていただきました。

40、50年前のソヴィエト時代であればカザフスタンでカザフ語など通じないというのが当たり前だったのですが、発表の中で、ロシア語が一番とはいっても、「≧」というマークになっていたように、カザフ語の存在感が非常に大きくなっているというのがすごく感じられました。今日本で言語学者としてカザフ語を研究している人はみんな、カザフに行ってもしょうがないというので、カザフ族が集住する、中国の新疆に行っていました。その意味でも、カザフスタンの言語状況も知ることができて、大変面白いと思いました。カザフ語の親戚の言語であるトルクメン語をぜひ履修しに来てください。

臼山　トルクメン語ができるのは、筑波大だけですよ。それから、ロシア語の応用科目で、梶山先生のロシア語科目も取れますから。ロシア語応用会話でしたか。

梶山　応用ロシア語講読です。

臼山　応用ロシア語講読ですね。梶山さんは、ノーベル賞受賞を政治的な理由で辞退したロシアの世界的な文学者、ボリス・パステルナーク（1890～1960）がご専門です。

ありがとうございます。皆さんの発表、本当に感激しました。ロシア語で言うと、До и после（ド イ ポスリ）、行く前と行った後で、相当変わったのではないでしょうか。性格が明るくなったとか、行動が積極的になったとか、やはり環境が変わったり、生活で使用する言語が変わると、思考も自分の行動も変わる契機となるのかもれません。ですから、海外に武者修行で出るというのはとても大切だと思います。

それから、徐さんの存在も大きいですね。留学生がいるというのは大きい刺激になります。彼女は中国から日本を含めていろいろなところへ行って生活しているので、日本人がいかにものを話さないか、発言しないか、空気を読まなければいけないかという側面を指摘してくれました。日本の文化は同調圧力が強い社会だと思うのですが、これは別に世界のスタンダードでも何でもありません。世界の国際会議に出れば、議論が激しくなることも当然普通にあります。質問があれば遠慮なくする、言いたいことがあれば言う。インドや韓国の研究者などは、発言を止めるのが大変だというぐらい積極的に話をすると聞きます。

何が言いたいかというと、やはり違うことが大事なのです。違うことが分かる。自由に議論して、勉強したいことを勉強して、考えたいことを考えて、自分の意思で他者とコミュニケーションを取る。文化の違いなどから失敗をしたり、大変な思いをしながら、自律的に判断し、行動できるようになるのが留学の体験だと思います。

学生の皆さんにとって特に有益なのは、日本を外から客観的に見られることです。非常に遠いところから日本を感じるというのでしょうか。日本にいたら日本をなかなか客観視できません。客体化、相対化の視点を養うために、あともう1カ国別のところに行くと、もっと良いと思います。英語圏のカナダに行ってもいいし、オーストラリアに行ってもいい。アメリカに行ってもいいし、中国に行ってもいいし、ドイツに行ってもいい。そうすると、自身のものの見方が複層化し、多層化する。二つ、三つの点から日本を見ると、日本の社会と文化など、さまざまな日本の在り方を立体化して捉えることができる。そうすると、ものの見方が非常に広がります。

世界というのは単純ではありません。思考や発想が凝り固まってしまうのはよくありません。

私自身の留学体験などからも言えます。1987から1988年にモスクワ留学に行って、モスクワから日本を見る。ソ連時代のモスクワでいろいろな民族共和国出身の友達ができて、当時、36、37年前ですが、キルギスにも行きましたし、アゼルバイジャン、あるいはジョージア、ベラルーシ、リトアニア、ラトヴィア、エストニアなど、いろいろなところに行きました。ウクライナにも行きました。そうやって場所を変える、日本ではない、現地の全く異なる環境からモスクワを見る、あるいは日本を見るということで、日本社会と自分を客体視できるような力、いわゆるメタ認知力が出てくる、培われていく。

結局、自分自身による自己と自文化社会の相対化の作業、すなわち、自己相対化というのは、メタ認知能力を高めます。この辺に自分の目を置いて、自分の生き方や、やっていることや、自分の姿を見る力というか、自分で自分を見る力ですね。これは人間しかできません。そうすると、いろいろな軌道修正ができますし、ここでチャレンジしないともったいないとか、そういうことも分かるのですね。ですので、そういう自分自身や日本文化、日本社会などを相対化する力を、皆さん、今回身に付けることができたのではないかと思います。

もう一つ、物事を相対化する力と並んで、自分自身で選ぶ力が身につくと思います。いろいろな選択肢を自分で「創って」、その中から選び取り、決断し、動く。そして、もう1回軌道修正して、また選ぶ。人生はその繰り返しだと思うので、少々失敗しようが何をしようが、状況を整えていける力が身に付くと思います。これで皆さん、海外に出て学ぶことに病みつきになったと思うので、可能であれば、また半年、一年と留学に出てほしいと思います。学部時代の留学が難しければ、また大学院でアメリカに行くとか、どこか外に出る。ニュージーランドでも、アフリカでも、もう1回カザフスタンでもいいです。カザフスタンはちょっともういいかなというのであれば、今度はアゼルバイジャンに行ってもいいです。ADA大学など、素晴らしい専門教育を社会科学分野で行なっています。授業はすべて英語でやっています。

少し長くなりましたけれども、本当に皆さん、成長した姿で帰ってきてくれて、教員、教職員は大満足です。では、皆さん、これからまた試験とか、春学期も夏休みに向けて収束していきますが、ぜひまたいろいろなチャレンジをしてほしいと思います。学群・学類の勉強も頑張ってください。筑波大学は、成績がいいとたくさん得します。さまざまなタイプの奨学金も取りやすくなるし、いろいろなチャンスが出てきます。そういうことで、自分の専門の勉強も頑張って、ロシア語もまた続けられたら続けてください。英語もやってください。英語は、海外とのつながりのある仕事をする場合、必要不可欠です。

英語、ロシア語、日本語、中国語ができたらすごいですよね。アラビア語ができたら完璧です。世界は広いし、4言語、5言語できる人など、ヨーロッパでもごまんといます。皆さんは若いのだから、チャレンジしてほしいと思います。最低でも三つです。

私が今皆さんの若さだったら、絶対三つぐらいはやりますね。英語、ロシア語、中国語、アラビア語の4つの言語に挑みたいですね。もし皆さんの若さだったらですよ。私はこれから人生終盤に入っていくところです。皆さんは、まさにこれからですので、ぜひたくさん勉強して世界に羽ばたいてほしい、世界で、そして日本で活躍してほしいと思います。

ということで、学生の皆さんに心からエールの拍手を送りたいと思います。ありがとうございました。

梶山　開始が遅れて、さらに時間が押して、皆さん、最後までお付き合いいただきありがとうございました。

担当組織　グローバルコミュニケーション教育センター
協力組織　日本財団「中央アジア・日本人材育成プロジェクト」
筑波大学アルマトイオフィス

2023年春期
海外研修
参加者募集！
（学群生・大学院生）

特設自由科目
「海外語学研修ロシア語C」
3単位 ※学群科目

返還不要
JASSO奨学金の支給※
14 万円
※ 所定の審査を通過した者

or

「はばたけ・筑大生！」
による旅費支援※
10万円
※ 所定の審査を通過した者

研修先：**カザフスタン共和国**（アルマトイ市）
CiC協定大学 アルファラビ・カザフ国立大学

多民族・多言語社会であるカザフスタンで
ロシア語圏の文化・社会の多様性について考える

- ロシア語研修
- カザフ語研修
- 異文化理解研修（学生交流，隣国キルギスへの訪問等）
- CiC科目ジュークボックスの授業科目履修
- 渡航前危機管理研修　等

- 期間（予定）：　2023年2月17日（金）～3月24日（金）（36日間、移動日含む、変更の可能性あり）
- 対象：　学群生、大学院生
- 定員：　25名（応募多数の場合は選考します）
- 費用：　①8～12万円程度（研修費用助成ありの場合）
  ②20～25万円程度（全額自己負担の場合）（研修費、食費、宿泊費等。航空券価格、為替等により変動。）
- 支援：　成績等をもとに審査のうえ、研修費もしくは渡航費が補助される場合があります。
- 単位：　特設自由科目「海外語学研修ロシア語C」（3単位）　※学群科目
- 受入機関：　アルファラビ・カザフ国立大学 準備学部 / 東洋学部
- オンライン説明会：　12月8日（木）11：30～12：10　時間になりましたら、以下のミーティングリンクからご参加ください
  （https://us02web.zoom.us/j/6415766861?pwd=MWd2NnhPUG9vZzdmUGFNUDBjOFluZz09）

応募締め切り
2022年
12月12日（月）

日本財団 THE NIPPON FOUNDATION

▼応募書類のダウンロード▼

＜申請書類＞
https://centralasia.jinsha.tsukuba.ac.jp/info/7822

＜問合せ＞
筑波大学　「日本財団中央アジア・日本人材育成プロジェクト」事務室：共同研究棟A203
TEL：029-853-4251
Email: info@genis.jinsha.tsukuba.ac.jp
ウェブサイト https://centralasia.jinsha.tsukuba.ac.jp/

CiC 協定大学のアルファラビ・カザフ国立大学への
ロシア語・カザフ語短期語学研修（派遣）の募集

カザフスタンでの春期ロシア語研修を下記の日程で開催することになりましたので、参加学生を募集します。

【研修概要】

春季休暇期間にかかる２月から３月にかけての 36 日間の期間を利用し、CiC 協定大学であるアルファラビ・カザフ国立大学（カザフスタン共和国、アルマトイ市）と本学が協力・連携し、同大学において、主にロシア語研修を行う。ロシア語のほか、国家語であるカザフ語の研究も実施する。また、CiC 科目ジュークボックスの授業科目を可能な範囲で履修する。多民族・多言語社会であるカザフスタンでの実践的な語学・異文化研修を通じて、ロシア語及びカザフ語の運用能力を伸ばすとともに、ロシア語圏の文化や社会の多様性に対する理解を一層深める。

【研修内容】

1.研修期間：2023 年 2 月 17 日（金）～3 月 24 日（金）（36 日間。移動日含む。変更の可能性あり）

2.研修地　：カザフ国立大学準備学部ないし東洋学部
（カザフスタン共和国アルマトイ市）

3.対　象　：学群学生、大学院生

4.研修内容：ロシア語研修、カザフ語研修、異文化理解研修、CiC 科目ジュークボックスの授業科目、渡航前危機管理研修等

5.単　位　：特設自由科目「海外語学研修ロシア語 C」3 単位

6.定　員　：25 名（定員に達し次第募集終了。応募者多数の場合、増員を検討する可能性もありますが、成績や志望動機等を考慮して選考を行います。）

7.研修費用：①　8～12 万円程度（研修費用の助成を受けた場合）
②20～25 万円程度（全額自己負担）
（航空券価格、為替等の事情により価格は変動します）

8.研修費用助成：審査の上で決定する。
①GPA2.3 以上の学生は、JASSO の奨学金 14 万円を支給。本研修は、2022 年度 JASSO 短期留学プログラム「ロシアとの連携（平成 26 年度「大学の世界展開力強化事業」選定事業）」の一環として位置づけ、助成を行う。日本人学生対象。
②GPA2.3 未満の学生は、令和 4 年度「はばたけ・筑大生！」により渡航費のうち最大 10 万円を支給。日本人学生及び正規留学生対象。

9.GPA（成績評価）の算出方法

・2 年次以上の学群生は令和 3 年度（1 年間）の成績より算出。学群 1 年次生については、2022 年度前期の成績より算出。
・下記表を参考に「成績評価ポイント」に換算し、計算式に当てはめて算出。

成績評価	A＋	A	B	C	D
成績評価ポイント	3	3	2	1	0

（計算式）
（「評価ポイント３の単位式」×３）＋（「評価ポイント２の単位数」×２）＋（「評価ポイント１の単位数」×１）＋（「評価ポイント０の単位数」×０）÷総単位数＝「成績評価係数」

＊奨学金の支給には、別途書類の申請が必要です。該当者には、参加が決定した後、改めてご連絡します。

10.担当組織：グローバルコミュニケーション教育センター

11.プログラム実務支援組織：日本財団中央アジア日本人材育成プロジェクト

12.応募資格および条件：
・本学に在籍する正規の学群生及び大学院生
・渡航・滞在中の事件や事故、災害に備え、「海外渡航届出システム」への登録および、「海外安全危機管理システム（ＯＳＳＭＡ）」および海外旅行保険への加入ができる者
・保護者および指導教員（クラス担任）の承認を得た上で、誓約書の提出ができる者
・本プログラムの目的や活動内容を十分理解し、それに沿った活動ができる者
＊事前研修への参加・学生交流準備（資料作成等）・報告書の提出・報告会の参加等、事前／事後活動を含む。

13.応募方法
下記 URL から申請書・誓約書をダウンロードし、必要事項を入力の上、申請書・誓約書（保証人は、両親等の親族）を提出先のメールアドレス宛に提出してください。

申請書類：https://centralasia.jinsha.tsukuba.ac.jp/info/7822
応募期限：令和 4 年 12 月 12 日（月）午前 10 時
（希望者多数の場合は、書類審査で決定する）
申請書の提出先：
Email:　info@genis.jinsha.tsukuba.ac.jp

14.結果通知について
12 月 16 日（金)までに、メールにてご連絡します。

15.問い合わせ先
日本財団「中央アジア・日本人材育成プロジェクト」担当事務室／共同研究棟Ａ203 号
電話：０２９-８５３-４２５１　／　Email:　info@genis.jinsha.tsukuba.ac.jp
担当：江下　＊対応時間：　9 時～17 時（月・木）

16.語学研修担当責任者
臼山 利信　　人文社会系教授
山本 祐規子 人文社会系准教授

筑波大学
2022年度 派遣学生による留学報告会（カザフスタン）報告書

発行年月日　2024年12月1日
監　　修　臼山利信
編集・校正　徳田由佳子（主担当）、大崎果歩、大竹豊
表紙（写真）　鳥居健太、松田直也
発　行　者　臼山利信
発　行　所　筑波大学
茨城県つくば市天王台１－１－１
TEL: 029-853-4251
E-mail: info@genis.jinsha.tsukuba.ac.jp
Web: https://centralasia.jinsha.tsukuba.ac.jp/
印刷・製本　メディア情報株式会社

筑波大学
University of Tsukuba

筑波大学「日本財団中央アジア・日本人材育成プロジェクト（NipCA）」
〒305-8571 茨城県つくば市天王台 1-1-1 筑波大学
Tel. 029-853-4251
E-mail: info@genis.jinsha.tsukuba.ac.jp
Web: https://centralasia.jinsha.tsukuba.ac.jp/

ISBN 978-4-910114-57-6